



TITLE:

実存論的神学(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

野呂, 芳男

CITATION:

野呂, 芳男. 実存論的神学. 京都大学, 1970, 文学博士

ISSUE DATE:

1970-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/213322>

RIGHT:

氏 名	野 呂 芳 男 の ろ よし お
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 53 号
学位授与の日付	昭 和 45 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	実存論的神学

論文調査委員 (主 査)
教 授 武 藤 一 雄 教 授 武 内 義 範 教 授 野 田 又 夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は第一章「現代状況と福音の理解」、第二章「話し合いの問題と神学的認識論」、第三章「啓示と実存」、第四章「パウル・ティリッヒの存在論」、第五章「神学における主観—客観の構造の超克」、第六章「キリストとしてのイエスの出来事」、第七章「時と永遠」、第八章「死後の命」の八章から成る。第一章は、本論文全体の序説をなすものであり、キリスト教と、いわゆる「近代後」としての現代的状況（科学的合理性と技術文明の支配の只中にありながら、「不条理」の体験がいよいよ深刻化しつつあるような現代的状況）との対話をとおして、両者がそれぞれ自らをいかに新しく理解しなおすべきかということが問われ、その際、著者の神学的立場が、R. Bultmann および F. Gogarten 等によって提唱された新約聖書の非神話化論、ないしはその実存論的解釈の路線に近いものであることが明らかにされている。

第二章では、著者のいわゆる「神学的認識論」が、常に「状況」との対話関係において成り立つものであることが説かれる。なおこの章において、Anselmus および Thomas Aquinas の「神の存在の証明」についての批判的検討が試みられ、またそれと関連して、神学的認識論が、キリストによる神的啓示と人間の「宿命成就」の体験との呼応関係において成り立つものであり、且つこのような体験の徹底的な自覚が、神学的認識を閉鎖的なものたらしめることなく、世俗的世界およびその思想との対話を可能ならしめる媒介契機となることが論究されている。

第三章は、信仰と理性との関係について、教会史上顕著な三つの立場、すなわち、(1) Augustinus, Anselmus の理性に対する信仰の優先の立場、(2) Averroes の信仰に対する理性の優先の立場、(3) Thomism の両者の調和を企図する立場、について論じ、それら三つの立場にそれぞれ類比的な現代神学の三立場、すなわち、(1) K. Barth (2) P. Tillich (3) R. Bultmann および F. Gogarten の思想を詳細に検討し、著者の立場がこの第三の立場に近いことを明らかにしている。しかし、次いでまた、Bultmann のいわゆる Historie と Geschichte の次元的差別の問題に触れ、著者独自の「次元的思惟」の思想について関説している。

第四章では、Tillich 神学の基本線が鮮明に叙述され、それに多大の評価を与えるものであるが、しかも彼の思想が実存論的神学の契機をもつとともに、なお思弁的・存在論的性格を免れていない点が批判される。

第五章においては、主として、現代神学の最も重大な問題の一つをなす史的イエスとケリュグマのキリストとの関係についての究明が行なわれ、この問題に関するブルトマンおよびいわゆる「ブルトマン後の神学者たち」の諸説を顧みつつ、さらに、この問題に関連して、「神学における主観—客観の構造の超克」について、また Historie と Geschichte の二元的分裂を止揚する実存論神学の「次元的思惟」の思想が具体的に解明されている。

第六章は、古典的キリスト論、特にカルケドン信条についてのアレキサンドリア型およびアンテオケ型の解釈について述べ、前者よりも後者のほうが実存論的なキリスト論を指向する点においてすぐれていること、すなわち、古典的なキリスト論の解釈においては、実体的な神人二性の統一を主張する正統主義的見解よりも、むしろ実存論的解釈のほうが支持さるべき所以を述べている。また以上と関連して、三位一体論および贖罪論の実存的解釈が試みられ、教理史上のそれらの代表的な諸説について詳細な批判的検討が行なわれている。

第七章においては、O. Cullmann, K. Barth 等の「時と永遠」の問題に関する思想を批判し、Bultmann と類似する歴史観が述べられているが、実存的決断の「時」と媒介される限りにおける存在論的「永遠」の思惟の必然性に言及している点が注目される。さらにこの章において、北森嘉蔵氏の「神の痛みの神学」に反論を加え、F. von Hügel や J. Wesley の思想から、いわゆる「神の不受苦性」の思想に関して、その実存論的意味を汲みとるとともに、それらの人の思想に大きな評価を与えている。

本論文の結尾をなす第八章では、J. Baillie, Ch. Hartshorne, P. T. Forsyth, M. de unamuno 等の思想を顧みながら、実存論的神学の立場から「死後の命」が肯定的に考えられなければならない所以が述べられているが、それは一種の神学的ないしは宗教哲学的エッセイともみなさるべきものであろう。

論文審査の結果の要旨

論文内容の概略は「論文内容の要旨」に述べたとおりであるが、著者の思想は、Bultmann, Gogarten, Tillich およびアメリカにおけるいわゆる実存主義的な神学者および哲学者の影響に負うところが大きいと思われる。しかし、著者独自の創見が見出される点も決して少なくない。本論文の内容は極めて多岐に亘っているが、その趣旨は全体として一貫して著者のいわゆる「実存論的神学」の特質を解明するものとなっている。「実存論的神学」は、ますます世俗化を深めつつある現代文明の只中におかれたキリスト教が、自らの教会的閉鎖性を打破して現代的状況との真摯な対話的關係に入ろうとするとき、神学の必然的な新しい形態をなすというのが著者の根本思想である（第一章および第二章）。著者のいわゆる「神学的認識論」は、神学的な認識が常に状況との対話的關係において成り立つものであることを主張するものであるが、それは同時に、啓示認識と相関的な本来の実存の自覚を喚起するもの——著者の表現によれば、「宿命成就」の体験とそれに即してどこまでも実践的に不条理と戦う「創作的生」を促すもの——でなければならない。

第三章において、信仰と理性の関係について、教理史の研究（特にAugustinus, Anselmus, Averroes, Thomas）を媒介しつつ、それとの類比的関連において現代神学の諸立場を論究し、その際特にBultmannの思想における Historie と Geschichte の二元論を止揚すべき「次元的思惟」の思想を展開している点は、著者の創見として特筆すべきであろう。この章は、第五章「神学における主観—客観の構造の超克」と密接に関連しているが、両章に述べられている思想は、歴史に対する実存論的な係り合いの次元と、どこまでも冷厳な実証史的な研究（特に Historie Jesu の史学的探究）の次元とが、それぞれの固有性を明確化せしめられ、また次元的差異を堅持せしめられながら、しかも相互に影響し合う相関関係において把握すべきことを説くものである。ただし、このことは、単に Historie と Geschichte との関係の問題に限定されるものではなく、およそ種々の学問的認識の基底をなす諸体験の次元的差異とそれらの相互関連を媒介した実存論的統一の追求という著者の根本思想に裏づけられているものであることが注目される。

第四章のTillich論は、Tillich研究として、それ自身独自の価値をもつものであり、著者の理解の透徹と、著者に対する彼の思想の影響の深さとを充分に看取しうるものであるとともに、そのTillich批判が、特に著者の実存論的思惟と相容れない彼の存在論的思惟の思弁的性格を衝く点において、極めて鋭いものがある。

第六章は、いわゆる古典的キリスト論、またそれと関連する贖罪論ならびに三位一体論の実存論的解釈について詳述するが、そこには、著者の古代教会史ならびに教理史に対する蘊蓄の深さを窺知するに足るものがある。

第七章の「時の永遠」についての叙述も、Bultmannの歴史と終末論に関する思想と類似するものをもつと考えられるが、この問題に関しても、著者の立場から当然帰結すべき、いわば存在論的思惟が実存論的思惟の中に止揚すべきことを説くものとして、傾聴に値するものがある。

終章の「死後の命」は、この問題に関する若干の神学者、宗教哲学者の思想を顧みつつ、「死後の命」ないし「永遠の生命」を強く肯定しようとするものである。それは、著者のいわば実存的な信仰告白的要素が極めて濃厚な神学的思惟の展開であり、それについての学問的論評は差し控えたいが、それは、著者の実存論的神学の立場の一貫性を害なうものではなく、むしろその一環をなすものとして、著者にとって主体的必然性をもつものであることが肯定されうるであろう。

以上述べたように、著者の取扱っている問題は、極めて多岐にわたり、各章とも博引旁証を伴ない、著者の学識の広さを示している。著者は、いわゆる組織神学の分野に対もる研究者であるが、本論文は、いたずらに伝統的な神学的思惟にとらわれることなく、しかも該博にして高度な教会史ならびにキリスト教思想史の歴史的研究を媒介して書かれたものであり、わが国におけるこの種の研究論文としては、極めて注目し値する力作であるといえる。著者の思索は、単に神学の領域にのみ限局されまたそこにおいてのみ妥当しうるような性格を超えて、神学という学問の学問性に対する深い反省に裏づけられている。

もとより著者は、神学的思惟を排するものではないが、少なくとも伝統的教義学の教会的閉鎖性を打破することによって、本論文は、広義の「基督教学」ないし「宗教哲学」に対して大きな寄与をもたらすも

のであることが疑われない。

しかしながら著者の論旨の一貫性にもかかわらず、その思想の表現力、ならびに神学的ないしは哲学的用語の使用には、しばしば、不十分なもの、必ずしも適切でないものが含まれ、またそのことが本論文の理解を妨げ、不必要に難解なものたらしめている欠点を看過することはできないが、それは、一つは著者の思想的成熟がなお不十分であることにも由来すると考えられる。そういった点は、著者の今後の研究の進展と思想的成熟に俟たなければならないし、またそのことが大いに期待される。しかしこのような欠点は、上述のごとき本論文のすぐれた特色を害なうものではない。

以上、審査するところにより、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。